

教育と情報



Obunsha

D

〔雑誌〕 〈高校合格情報誌〉 高校合格 〈大学合格情報誌〉 大学合格 螢雪時代 私立大螢雪 短大螢雪 大学受験講座ラジオテキスト	〔書籍〕 （小・中・高）参考書 教科書・語学教材 辞典・事典 児童書・スポーツ書 図鑑・科学書・歴史書 一般書・ビジネス書	〔放送〕 大学受験ラジオ講座 模擬試験・実力テスト 通信添削指導（旺文社ゼミ他） 全国学芸科学コンクール 名作読後感想文全国コンクール	〔事業〕 OTHETOPゼミ・CA Oスクールシステム・旺文社 インターメディア	〔関連団体〕 財団法人 日本英語教育協会 （通信教育、雑誌・放送へ百万人の英語） 財団法人 日本LLI教育センター（LLI教室）	●図書案内（小・中・高別）送呈 〒162 東京都新宿区横寺町 旺文社
--	--	---	--	--	--

旺文社 国語辞典

1965年 2月10日 初版発行
 1986年 10月20日 改訂新版発行
 1992年 重版発行

編者
 発行人
 編集人
 印刷所
 付物印刷所
 製本所
 製函所

松山 村口 明穂
 和 田 利 政
 赤 尾 一 夫
 新 井 義
 共 同 印 刷 株 式 会 社
 開 成 印 刷 株 式 会 社
 株式会 社 市 川 製 本 所
 清水印刷紙工株式会社

発行所 株式会社 旺文社
 〒162 東京都新宿区横寺町
 電話 (編集) 03-3266-6356
 (販売) 03-3266-6416

ISBN4-01-077506-8 103025 ©旺文社 1986
 (許可なしに転載、複製することを禁じます) Printed in Japan

乱丁・落丁はお取りかえしますので、本社に直接お申し出ください。

編者のことば

言語が人間の社会生活において果たす役割はきわめて大きい。情報社会といわれる現代にあつて、それはなお一層の感がある。われわれは、ひごろ、言語を用いて「話す」「聞く」「書く」「読む」生活を営んで、意思や情報を伝達、交換し、知識や文化を蓄積、伝承する。さらに、言語によつて、ものごとを思考し、想像する。

言語は時間の推移とともに変容する。時の流れのなかで、一つの語自体が消長したり、語の一部の意味や概念が微妙な変化を見せたりする。また、言語と言語が、相互に影響しあいつつ、独自の変化、発展を遂げる場合も多い。最近とくに、英語などヨーロッパ諸国語の流入にともなつて、国語のなかにおいて外来語の数が増加の一次をたどつてきていることも注目される。

辞書の編纂は、新刊・改訂のいずれの場合をとわず、このような言語全体の構造的変化を究明、洞察したうえで、その基本方針が打ち立てられなければならない。次に、その基本方針に沿つて、採録項目の選定、解説の方法、用例の選択など、内容の検討、吟味を深めていく必要がある。

「旺文社国語辞典」が世に出てすでに二十八年になる。一九五八年に誕生し、その後一九六五年、一九七〇年、一九七三年、一九八〇年と四回にわたつて改訂を行つてきた。その間、私たちはつねにその時々々の要求に応えられるような清新な国語辞典であることをめざして校閲を重ねた。また、辞書の項目はおのおの独立して存在し、任意に引かれるため、項目一つひとつについて解説・表記に過誤のないように努めた。幸いにして、本辞典は初版以来、学生・一般社会人の方々に広く愛用されてきている。

今回の改訂でもやはり、語彙の再検討、新語の増補のほか、正確な語釈の徹底と生きた用例の収録にとくに力を注いだ。本辞典独自の見出し項目である固有名詞、和歌・俳句、故事・ことわざ・慣用句、重要な一字の漢字の各項目、および特設の注意・参考・語法・用法・語源、まぎらわしい同音同訓異義語の使い分け、故事の各欄

ではさらに解説を充実させた。特設欄のうち、まぎらわしい同音同訓異義語の使い分け、故事については枠囲みにして示した。また、今回の改訂の新しい企ては、巻頭にカラー口絵の「国語年表」「国文学説対照表」など、巻末に「早引き 漢字・難読語一覧」を設けたことである。前者は、無味乾燥でない滋味のある国語学習の一助となるように、後者は、漢字の読み方がわからなくて辞書を引く場合、字の型からさがす項目索引の便となるようにと意図し、作成した。

さらに、今回の改訂で、一九八六年七月一日に内閣告示となった「現代仮名遣い」にもとづいて、見出し語や解説等の表記の統一をはかり、全面的に新しい国語の書き方を示した。新時代の言語生活に十分活用され、役立つものとなろう。

なお、今回の改訂から、山口明穂・和田利政の二人が新たに編者に加わった。青木一男・安西廸夫・飯田満寿男・中村幸弘・森昇一の各氏には編集委員として、長期間にわたってご協力賜ったことに深甚の謝意を表したい。また、執筆・校正に多大のお骨折りをいただいた左記の方々に心よりお礼を申しあげる次第である。

秋山和男・阿久沢登美子・安孫子友行・荒木雅実・飯沼正武・五十嵐一郎・石井友雄・泉康子・磯部勇・一色明・稲本茂・岩下裕一・岩瀬重雄・岩本伸一・太田正行・大野邦男・加島直吉・柏原司郎・小久保崇明・小菅俊夫・佐藤喜一・佐藤憲正・島田耕治・清水勝太郎・鈴木亨・武石彰夫・立平幾三郎・千葉豊・都染直也・中島昭・橋本健一・花輪茂道・林茂夫・山口恵一郎・山田侑平・和田強（敬称略、五十音順）

一九八六年 初秋

編 者

この辞典のきまりと使い方

(一) 見出し語の範囲

この辞典は、国語の学習および日常の言語生活に役立つように作られたものであって、見出し項目として掲げたものは、その目的にかなうよう、現代の日本語を中心とし、主要な外来語、百科語、古語、固有名詞(人名・地名・作品名など)、慣用句、ことわざ、故事成語、著名な和歌・俳句、および二四〇〇余の一字の漢字である。

(二) 見出し語

(1) 原則として、昭和六十一年改定の現代仮名遣いにより、平仮名の太字で表記した。
ただし、

(ア) 外来語は片仮名で表記した。

(イ) 古語・和歌・俳句は歴史的仮名遣いで表記したが、古語・現代語にわたるものは現代仮名遣いで見出しを表記した。

例 **いらふ**【答ふ・応ふ】^{いさふ}(自下二)【古】こたえる。
たちかえる【立(ち)返る】^{かへる}(自五)^{かへりかへる}(ハ)た
ちは接頭語①かえる。もどる。「原点に―」②引き返す。③【古】くりかえす。

(2) 一字の漢字(大活字)のものは、字音を見出しとした。

(3) 見出し語を構成する要素を「」を用いて区切り、語の構成を明らかにした。

例 **あさひ**【朝日・旭】
やまざくら【山桜】

ただし、

(ア) 単語と単語が連なった場合は、最小単位に区切らず、意味のとりやすいように単語と単語を大きく区切った。

例 **じゆうしゆぎ**【自由主義】

あいべつりく【愛別離苦】

いてもたってもいられない【居ても立ってもいられない】

(イ) 固有名詞・枕詞^{まくらことば}は、一部を除いて「」をふいた。
(4) 活用語は原則として終止形を掲げ、語幹と語尾の区別を「・」で示した。形容動詞は語幹を掲げた。

例 **あそぶ**【遊ぶ】 **おだやか**【穏やか】

(5) 和歌・俳句は、第一句めを平仮名で見出しとした。

例 **ひさかたの**…【和歌】(久方の 光のどけき……)】

(6) 三字以上の見出し語(漢字一字の字音語の場合は除く)に、他の語がついてできた複合語は、その見出し語のあとに一括して掲げ、親見出しにあたる部分は「―」で掲げた。これらはそれぞれ行を改めて掲げた。ただし、検索の便宜上、この形式をとらず、独立見出しとしたものもある。

例 **こうとう**【高等】……

― **がっこう**【―学校】……

(7) ある見出し語に、他の語句がついてできた慣用連語・ことわざ・格言などは、その見出し語との重複部分に「―」を用い、漢字仮名交じり・太字で表記し、漢字にはその読みを示した。冒頭部分が活用語で、見出しと語形のかわる場合は「―」を用いず、全形を掲げた。これらは行を改めず追込みで掲げた。

例 **あいそ**【愛想】……
― **が尽きる**…… ― **もこそも尽き果てる**……

あたゝる【当(た)る】……………

あたって砕くだけろ……………

検索の便宜上、独立見出しで掲げたものもある。

例 いわぬがはな【言わぬが花】

(8) 接頭語には見出しの下に、接尾語には上に「」をつけた。

例 うち【打ち】 たち【達】

(三) 見出し語の配列

見出し語は、つぎの順序によって配列した。

(1) 五十音順

(2) 清音・濁音・半濁音の順

例 はは【母】 はば【幅・巾】 ばば【婆】

パパ【papa】

(3) 促音・拗音・直音の順

例 てっき【鉄器】

てつき【手付き】 きょう【今日】

(4) つづりが同じ場合——語の種類と品詞別によって配列した。

① 一字の漢字(大活字) ② 接頭語 ③ 接尾語 ④ 名詞 ⑤ 代名

詞 ⑥ 自動詞 ⑦ 他動詞 ⑧ 補助動詞 ⑨ 形容詞 ⑩ 形容動詞

⑪ 連体詞 ⑫ 副詞 ⑬ 接続詞 ⑭ 感動詞 ⑮ 格助詞 ⑯ 接続助

詞 ⑰ 係助詞 ⑱ 副助詞 ⑲ 終助詞 ⑳ 間投助詞 ㉑ 助動詞

(5) 配列の上での外来語の長音「ー」の扱いは、「ー」の前にくる音

の母音により、アイウエオのいずれかにあたるものとみなす。例

えば、カーテンはカアテン、チーズはチイズ、プールはプウル、

ケーキはケエキ、クロースはクロオスとみなして配列した。

(6) ある見出し語に他の語がついてできた慣用句・ことわざなどは、

これらを先に掲げ、複合語をあとに掲げた。

(四) 見出し語の書き表し方

(1) 見出し語の書き表し方を「」の中に示した。固有名詞は「」

の中に示した。仮名は、原則として平仮名を用い、現代仮名遣い

で示したが、見出し語が古語の場合は、歴史的仮名遣いで示した。

(2) 「常用漢字表」にある漢字の字体は、「常用漢字表」に従った。

(3) 送り仮名は昭和四十八年内閣告示「送り仮名の付け方」に従った。

送り仮名をばくことの許可される語は、つぎのように示した。

(一) に包まれてゐるものは、はぶいてよいことを表す。

例 とらゝえる【捕(ら)える・捉える】

うりあげ【売(り)上げ・売上】

送り仮名をばくのが本則の場合は許可を()に包んだ。

例 おこなう【行(う)・行なう】

(4) 「」の中の漢字につぎの記号をつけて漢字の種類を示した。た

だし、固有名詞、中国語・朝鮮語などにはこの記号をはぶいた。

△「常用漢字表」にない字

○「常用漢字表」にあるが、その音または訓が掲げられて

いない読み

× 従来あて字と考えられた字

(5) 外来語の原語つづりは「」の中に示し、英語を除いて、該当す

る国語名を示した。

例 カプセル【ガイKapsel】

ギョーザ【中国餃子】

(6) 英語のつづりは、米英両式がある場合は、原則として米式とし、

また、いわゆる和製英語にはその表示をした。

例 ユーモア【humor】

イージーオーダー【和製英語】

〔五〕 歴史的仮名遣い

- (1) 見出し語の表記形「一」の下に歴史的仮名遣いを片仮名で示した。
- (2) 見出しが歴史的仮名遣いで表された古語には、現代仮名遣いを平仮名で示した。
- (3) 見出しの仮名遣いと一致する部分は、語構成単位に「」で示した。

例

けいこう【傾向】カウ
ゆふづくよ【夕・月夜】ヨ

〔六〕 品詞および活用

- (1) 見出し語には、品詞および活用の型を（ ）に包み、略語で示した。ただし、名詞だけの場合や、故事・ことわざ・連語は品詞名を省略した。
- (2) 品詞の分類および活用の種類については、基本的には現行の学校教科書の一般的なものに従った。ただし、一部のものについては、さらにくわしくつぎの形式によった。
- (3) 名詞のうち、代名詞は（代）として区別した。
- (4) 普通名詞のなかで、動詞のサ変および形容動詞の語幹となるものは、それぞれ品詞名を併記し、語尾活用の基本形を示した。

例 めいき【明記】（名・他スル）

あしはや【足早・足速】（名・形動タ）

- (ウ) 動詞は、自動詞・他動詞・補助動詞の区別を示した。
- (エ) 助詞はつぎの六分類に従い、それぞれ略語で示した。

格助詞・接続助詞・係助詞・副助詞・終助詞・間投助詞

- (3) 口語の動詞・形容詞・形容動詞・助動詞、および文語の助動詞には各活用形を示した。
- (フ) 未然形・連用形・終止形・連体形・假定形（已然形）・命令形の

この辞典のきまりと使い方

順に「・」で区切った。

- (イ) 一つの活用段に二つ以上の形がある場合には、一方を（ ）で包み、活用形のない段には「○」を入れた。なお、形容動詞「あんな」「こんな」など、語幹がそのまま連体形に用いられる場合は「○」で示した。

例 ただしい【正しい】（形）カヨウカク

あんいな【形動タ】ダロウカク

- (ウ) 名詞とサ変動詞、名詞と形容動詞のように二つ以上の品詞に属するものは、活用形を省略した。
- (4) 助動詞は、（助動下一型）のように、活用の型を示した。
- (5) 助動詞の標示は、口語では見出し語に「と」がついて副詞、「たる」がついて連体詞となることを表す。文語では「タリ活用」といわれるものである。

例 どうどう【堂堂】ダウドウ

- (6) 二つ以上の単語が合わさってできた複合語も一語意識の強いものは単語として扱い、いずれかの品詞名を示した。
- (7) 一語の語義が二つ以上に分かれて、その一つが連語の場合は、■で分け、（連語）として示した。

〔七〕 語釈・解説、および用例

- (1) 古語・俗語・方言・枕詞マクことばなどの語の種類、百科語の区分は、それぞれ略語を用いて標示した。
- (2) 語釈・解説は、その語の基本的な意味を明らかにし、また現代語としての意味・用法をできるだけもたさないようにした。

- (3) 一つの見出し語に二つ以上の意味があるときは、①②③…を用いて分け、さらに細分するときは、㉠㉡…を用いて分けた。また、品詞が異なると意味も異なるときや、動詞で自動詞・他動詞・補

助動詞があり、意味が異なるときは、■・●を用いて分けた。

- (4) 語釈・解説では、できるだけ補足的説明、たとえば原義、見出し語の漢字の字義に即した説明などを()に囲んで加えた。

- (5) 見出し語が口語の動詞、形容詞、形容動詞の場合には、語釈・解説のあとにその語と関係の深い語の語を掲げた。

(7) 見出し語が動詞の場合

- ① 他動詞に対する自動詞と、その活用型。自動詞に対する他動詞と、その活用型。また、見出し語の文語の語形と活用型。

例 つら・ねる【連ねる・列ねる】(他下一)

……………自つらなる(五) 文つら・ぬ(下二)

- ② 可能動詞(五段活用動詞が下一段に活用して可能の意をもつ動詞)

例 うご・く【動く】(自五)……………他うごかす(五) 可能うごける(自下一)

(イ) 見出し語が形容詞・形容動詞の場合

文語の語形と、その活用型。
例 うつく・しい【美しい】(形)……………文うつく・し(シク) しか【静か】^シ(形動ダ)……………文(ナリ)

- (6) 対義語・対応語をつぎの形式で示した。

例 あつ・い【暑い】……………寒い

ただし、対義語・対応語が、①②で区分されたいくつかの語義に通用する場合は、それらの語釈のあとに《 》に包んで示した。

例 おも・い【重い】(形)……………①目方が多い。おもたい。

「荷物が」②大切だ。重要だ。「一任務」③悪い。程度がはなはだしい。ひどい。「病気が」……………(←軽い)

- (7) 意味の理解を助けるため、用例をつぎの要領で示した。

(7) 現代語の用例は現代仮名遣い、古語の用例は歴史的仮名遣いで

示した。古語の用例には原則として出典を示した。出典名は、《源氏》《更級》《古今》などのように略称で示した。

- (イ) 用例中の見出し語にあたる部分は「一」を用い、見出し語が動詞・形容詞などで、活用して見出し語と語形が変わる場合には、語幹を「一」で、語尾は「・」で区切って仮名で表した。

例 いた・い【痛い】(形)……………①……………②……………「チャンス」を逃がしたのは一・かった」

- (ウ) 語幹・語尾の区別のない動詞や、助動詞の用例が活用して見出し語と語形が変わる場合、見出し語相当部分を太字で示した。

例 みる【見る】(他上一)……………①……………②……………「みれば一ほど美しい」

せる(助動下一型)……………①……………②……………「使に行かー」

……………「病気のため、休ませていただく」

〔八〕 一字の漢字

- (1) 「常用漢字表」にある漢字、人名用漢字、およびそれ以外で一般社会生活に用いられることの多い漢字、総数二四〇〇余字を収めてその字義を解説した。(平成二年に追加された人名用漢字一八八字については、付録「人名用漢字一覧」を参照されたい)

- (2) 見出し 漢字の字音を見出しとし、「常用漢字表」に字音が二つ以上掲げられている場合は、そのすべてを見出しとして掲げ、字義解説はより一般的と思われる字音見出しの項に掲げた。

(3) 字体

(イ) 他項目より大きい活字で【 一 】の中に漢字を示した。

(ウ) 常用漢字表「人名用漢字別表」に従った。

(ウ) 常用漢字表「人名用漢字別表」に従った。

漢字は、新字体の下にやや小さい字で旧字体を掲げた。人名用漢字で旧字体のあるものは人名用漢字の字体の下に掲げた。

(二)「常用漢字表」にない漢字には一般項目と同じ「」を、人名用漢字には「人」を付けた。

(4) 音訓

(イ) 字音を片仮名で、字訓を平仮名で示した。

(イ) ①「常用漢字表」にある漢字については、「常用漢字表」に掲げられている音訓は太字で示した。ただし、字訓については送り仮名の部分は細字で示した。また、常用漢字表には掲げられていない音訓も、一般によく使われる代表的なものは細字で示した。②「常用漢字表」にない漢字の音訓は細字で示した。③字音には歴史的仮名遣いを添えた。

(5) 筆順 常用漢字には筆順を示した。

(6) 字義、その他

(イ) 熟語を構成する成分としての字義をもれなく掲げ、各字義についての用例を「」に示した。

(イ) 字義解説のあとに、**【注意】**には主として字体についての注意事項を、また、◇をつけてその漢字が特殊な読みとなる場合の例を示した。さらに、その漢字が人名として用いられる場合の読みを実例にもとづいて**【人名】**の下に示した。また、**【参考】**には補足事項を示した。

(ウ) 同じ意で使われる漢字をⅡで示した。

〔九〕「注意」「用法」「語源」「語法」「参考」「欄

見出し語の理解をいっそう深く徹底させるために、語釈・解説のほかに、つぎの欄を設けて多角的な解説を施した。

(1) **【注意】** 見出し語の読み方、書き方、使い方の上で誤りやすいこと

がらを指摘し、注意を要することがらを解説した。

(2) **【用法】** 見出し語の、日常生活での正しい使い方に関する事項を解説した。

(3) **【語源】** 見出し語の成立過程、一単語の構成を解説した。

(4) **【語法】** 連語の構成、語の文法を主とした用法、口語の助詞・助動詞の接続などを解説した。

(5) **【参考】** 見出し語と類語・関連語との区別、語釈・解説を別の角度からみた説明、その他見出し語に関係する事項を解説した。

〔十〕 囲み記事「使い分け」「故事」

日常よく使われる、まぎらわしい同音同訓異義語約一三〇組の使い分けと、故事約一七〇の解説は、特別に枠で囲んで収めた。

〔十一〕 和歌・俳句、および俳句の季語

(1) 中学校、高等学校の国語教科書や参考書にあらわれる現代短歌・現代俳句を、その頻度数を基礎にして約一四〇を本文に採録した。古典関係の和歌は小倉百人一首に限った。

(2) 本文に採録した俳句、およびその他一般項目で俳句の季語となるものには、語釈・解説のあとに、**【春夏秋冬】**をつけて季を示した。季に異説のある場合、および親語から派生した語の季語は(一)に包んで示した。

〔十二〕 口絵・付録

巻頭には国語学習に役だつように企画・作成されたカラー口絵を収めた。巻末付録には実用的な多くの記事を収めた。特に「早引き漢字・難読語一覧」は漢字の字型による単純な三分類方式を採用して、漢字・難読語がすぐ引けるように工夫してある。

略語・記号表

【品詞・活用など】	一字の漢字の意味
(字義)	
(接頭)	接頭語
(接尾)	接尾語
(名)	名詞
(代)	代名詞
(自)	自動詞
(他)	他動詞
(補助)	補助動詞
(形)	形容詞
(形動)	形容動詞
(連体)	連体詞
(副)	副詞
(接)	接統詞
(感)	感動詞
(格助)	格助詞
(接助)	接統助詞
(係助)	係助詞
(副助)	副助詞
(終助)	終助詞
(間助)	間投助詞
(助動)	助動詞
(連語)	連語

(五)	口語動詞の五段活用
(四)	文語動詞の四段活用
(上二)	上一段活用
(上二)	上二段活用
(下二)	下一段活用
(下二)	下二段活用
(カ変)	カ行変格活用
(サ変)	サ行変格活用
(ナ変)	ナ行変格活用
(ラ変)	ラ行変格活用
(スル)	「する」をつけてサ行変格活用となる
(タ)	口語形容動詞の活用
(ハ)	「と」がついて副詞となり、
(ク)	「たる」がついて連体詞となる
	文語形容動詞の活用

(シク)	文語形容詞のシク活用
(タリ)	文語形容動詞のタリ活用
(ナリ)	文語形容動詞のナリ活用
(目)	自動詞
(他)	他動詞
(文)	文語
(可能)	可能動詞
【百科語など】	
(文)	文学
(文法)	文法
(世)	世界史
(日)	日本史
(社)	一般社会
(経)	経済
(法)	法律
(地)	地理
(数)	数学
(物)	物理
(化)	化学
(天)	天文・天球
(海)	海洋
(気)	気象・大気
(地質)	地質・地球

(動)	動物
(植)	植物
(保)	保健
(医)	医学
(生)	生理学
(音)	音楽
(美)	美術
(映)	映画
(演)	演劇
(建)	建築
(服)	服飾
(工)	工業
(農)	農業
(商)	商業
(水)	水産
(宗)	宗教一般
(仏)	仏教
(基)	キリスト教
(哲)	哲学・倫理
(論)	論理学
(心)	心理学
米…米語	
【漢字につけた記号など】	
△ 常用漢字表にない漢字	
○ 常用漢字表にある漢字	

字でその音・訓が掲げられていない読みあて字とされるもの
人名用漢字（一字漢字での表示）

【その他】

〔方〕…方言

〔枕〕…枕詞まくらことば

〔古〕…古語

〔俗〕…俗語

|| 同意の漢字

↑ 対義語・対応語

↓ 語釈がなく、他の見出しを参照する

↓ 語釈があり、なお、他の見出し・囲み記事・さしえを参照

（ ） そこまでの語釈のすべてにかかる対義語・対応語を囲む

⋮ 品詞が二つ以上あつて意味の異なる場合、および動詞の自他を分ける

【春夏秋冬】新年 季語

あい いれない【相】容れない。『ながいの立場や主張などが一致しない。たがいに認め合わない。』「一仲」「思想」

あい いろ【藍色】に濃い青色。あい。

あい いん【合い】印に帳簿・書類などが他の帳簿・書類など合っているに押す印。あいにる。合い判。

あい いん【愛飲】名・他スル。好んで飲む。あい いち【相打ち・相撃ち・相討ち】に剣道などで、双方が同時に相手をついて。転じ。引き分け。

アイ エム エフ【I M F】〈International Monetary Fundの略〉経国際通貨基金。為替相場変動の安定。平価切の下げ競争の防止などを目的に設けた機構。

アイ エル オー【I L O】〈International Labor Organizationの略〉国際労働機関。国際連合の専門機関の一つ。労働条件の改善をめず。

あい えん か【愛煙家】たばこの好きな人。

あい えん きん【合縁奇縁・合縁機縁】男・女・夫婦・友人など、人と人との交わり、たがいの気心が合うもの合わないもの、すべて不思議な縁によるということ。【参考】類似のことば縁は異なもの。

あい おい 相生【い】①ついに生育すること。②同じ根元が幹が二本伸びること。『の松』③あいおい(相老)あいおい(相老)に夫婦がともに長生きすること。【参考】同音なので、相生に通じ。

アイ オー シー【I O C】〈International Olympic Committeeの略〉国際オリンピック委員会。

あい か【哀歌】悲しい心情をうった詩歌。悲歌。エレジー。

あい か【合】鍵にその錠に合うように作った別のかぎ。

あい か【合方】①芝居で役者のせりふに合わせたたり、せりふ間に入れたる三味線など。②長閑な、暇の間にはいる三味線行の長い間奏。③能で、謡ひの囃子方など。

あい か【相方】①相手。②遊里で、客の相手をする遊女。【参考】②は、敵・娼とも書へ。

あい が【合鴨】間・鴨に①動にあおくひあひる。『まがも』の雑種。食用に。【参考】②あひるの肉。

あい か【かわらず】相変わらず。【参考】(副)変わることなく。今までのとおり。『元気でます』

あい かん【哀感】悲しい感じ。

あい かん【哀感】悲しい感じ。

あい い【哀願】引(名)自スル。事情を述べ、人の同情心

に訴えていねいこと。哀訴。

あい がん【愛・玩】引(名・他スル)たしつにしておかひが慰みず。【参考】①動物。

あい き【愛機】愛用している飛行機・写真機など。

あい き【合】着・間着に①あいにく②上着と下着との間に着る衣服。

あい きどう【合気道】武道の一つ。古流美術の大東流を源流とし、当て身・関節技を主とする護身術。合気術。

あい ぎやう【愛・敬・主】①動作・態度などが温和で優しく魅力のあること。②慈しみ敬むこと。敬愛。【参考】あいぎやうとて。

あい ぎやう【相客】①同じ席にいる客。②旅館で同じアイキュー【I Q】intelligence quotientの略】知能指数。知能の発達を数字で表したもの。【参考】一〇〇が標準で、それより大ければ優良。

あい きやう【愛郷】自分の故郷を愛すること。『一心』

あい きやう【愛・敬・愛・嬌】①こころで親しみやすいかわいさ。『のあ娘』②けいな感じ、ほほえましい感じを人に与える表情やふるまひ。『者の娘』

あい きやうげん【間狂言】能の上演で、間にはさんで狂言が受け持つ部分。多くは里人などに扮して曲の主題を物語り、能の進行を助ける。間。【参考】その詩歌。

あい きん【愛吟】名・他スル。好んで詩歌を口ずさむこと。『また、その詩歌。』

あい きん【合・釘・間・釘】に両端のものがたき板を【参考】①は、首とも書へ。

あい くる【愛・くるしい】(形)たいそうかわいらしい。『顔立ち』文あいらしい(シク)。

あい けい【愛敬】名・他スル。愛しむこと。『の念』

あい けん【愛犬】①かわいがっている犬。②犬をかわいがること。

あい けい【相子】にたがいの勝ち負けのこと。ひきわけ。

あい こ【愛顧】目をかけて引きよる。ひいき。『こーをいただく』用。接客から「愛顧」を受ける商人や芸能人の側かいう語。

あい こ【愛護】(名・他スル)かわいがりたいせつに守ること。動物一週間。

あい こう【愛好】引(名・他スル)愛し好むこと。『切手・一家』

あい こく【愛国】自分の国を愛すること。『一心』

あい ことば【合い言葉】①味方どうしが確認を合つた、あらかじめ決めておく合図のこと。②仲間間の主張を短くして表した。標語。モットー。『当店のいはざーびさ第一』

あい こま【間・駒】将棋で、玉手をかわれたときなどに、そのき筋の途中にこまを打つて。また、そのこま。

あい さつ【愛妻】①妻を愛すること。②愛している妻。

あい さつ【挨拶】名・自スル。①人にかつたとき別れるときにかつた社交的なこと。また、その動作。初対面の②儀式・就任・解任などのとき、敬意・祝意・謝意などを述べること。また、そのことば。『来賓の③応対。返事。うけとえ。』

あい し【哀詩】悲しい心情をうった詩。

あい じ【愛見】親がかわいがっている子供。いとこ。

アイ シー【I C】integrated circuitの略】集積回路。

アイ シー【I E M】integrated circuitの略】集積回路。

アイ シー【I E M】integrated circuitの略】集積回路。

あい じやう【愛車】①愛用の車。②自分の車を大事にする。【参考】その愛する車。執着すること。また、男女の愛に執着すること。『あいつの』

アイ シャドロー【eye shadow】目に陰影をけるためにまぶたに塗る、青・灰・茶色などの化粧品。

あい しゅう【哀愁】悲しい感じ。うら悲しい感じ。

あい しゅう【愛執】引(名・他スル)愛するものに執着すること。愛着。

あい しゅう【愛書】①本が好きでたいせつにすること。『一家』②愛読している。愛読書。

あい しゅう【相性・合(性)性】①たがいの性質の合いくあ。『のいい相手』②年月日を陰陽五行説にあてはめてみた結果、男女の性質がまふこと。③性。

あい しゅう【哀傷】①悲しみに心をいためること。②人の死を悲しむこと。哀悼。

い か【歌】人の死をうた。また故人を追慕する歌。『古今集』以後の勅撰集は、この部立の一つ。『万葉集』の挽歌にあたる。

あい しょう【愛・妾】引(名・他スル)かわいがっているめかけ。

あい しょう【愛称】正式の名前とは別に親しんで呼ぶ名前。

あいしーよう(愛唱)①(名・他スル)①好んで歌うこと。「歌」②詩歌や文章などを好んで口ずさむこと。【参考】②は「愛」を尊。

あいじょう(愛情)①②愛しいつくしむ心。深く思いやる気持ち。「母親の―」をこめて育てる②異性を恋慕する気持ち。「問題で悩む」

あいじょう(愛嬌)①親がかわいがっている娘。まなむすめ。令嬢。周旋経い敬意を含めて他人の娘についていう。

あいじる(合い印)①他と区別するために継ぎ目などにつけるし。②戦場で敵方と区別するためにつけるし。③

あいじん(合い印)①愛する人。恋人。②情婦または情夫。アイス①水。②(他の語に冠して)水で冷やした意を表す。「コーリー」③アイスクリーム」の略。

—キヤンデー(和製英語)棒状の水菓子。【参考】

—クリム(ice cream)牛乳・卵の黄身・砂糖・香料などをまぜて作る水菓子。乳脂肪八パーセント以上を含むものをいう。【参考】

—ショー(ice show)アイススケートをつけ、氷上で見せ—スケート(ice skate)氷上を走るスケート。

—ピク(ice pick)氷を砕くための鉋。

—ボックス(ice hockey)氷を使った手技的な冷戦車。

—アイスランド(Iceland)北大西洋北極圏付近の共和国。一九四四年デンマークから独立。首都はレイキヤーク。

あいする(愛する)(他サ変)①かわいがり、つくしむ。孫を―②異性を恋慕する。③好む。「孤独を―」④大切に思ふ。「一祖国(文)あり(サ変)蘭達(サ変)から転じて、口語ではあひす(五)のほが有力。

あいせき(哀惜)(名・他スル)人の死などを悲しむこと。「―の念に堪へない」

あいせき(哀惜)(名・他スル)惜しんでいせつにする。①

あいせつ(哀切)(名・形動スル)たいして哀れむの悲しいさま。

あいせん(相先)①たがひせん(互い先)アイゼン(名・他スル)登山用具の一種。靴の底にとりつける鉄製のすべり止め金具。

あいせん(みようお)①愛染明王。②「仏」三つの目と六本の腕をもち、怒りの相を表すが、敬愛の心で衆生を救う神。愛欲をさかせる。

あいそ(哀訴)(名・他スル)同情を求めようになげき訴える。哀願。

あいそ(愛想)①明るくて人当たりのよいこと。「―のよい主人」②人に寄せる好意。また、もてなし。「何のおもなくすすみません」③飲食店の勘定。「ねえん、おー」【参考】あいそ(哀訴)の転。

—が尽き、る。店側の者が言った語。

—あひそが尽き、る。いやになつて見限ること。

—わかし(一笑)①(名・自スル)相手の機謙をとるための笑ひ。おせし笑ひ。

あいそ(愛憎)①愛する(五)憎む(四)。「―の念」

あいぞう(愛蔵)①(名・他スル)たせつにしまつておくこと。

あいそく(愛息)親がかわいがっている。令息。【参考】敬意を含めて他人の息子をいう。

アイソトープ(isotope)①「原子番号が同じで原子質量の異なる元素。同位体。同位元素。



あい(たい)【相対】①当事者だけがしむかいで事を行うこと。②対等な事を行うこと。

—すく、相手と相談の上でする。①

あいたい(対する)相対する①(自サ変)②反対の立場で相手にむかう。対立する。「―考え」(文)あひた(サ変)

あいたし(ゆき)(愛他主義)他人の幸福や利益を目的として行動しようとする考え方。利他主義。↑利己主義。

あいち(愛知)中部地方西南部、太平洋に面する県。名古屋市を中心し中京工業地帯を形成する。県庁所在地は名古屋市。

あいちやく(愛着)(名・自スル)自分に関係のある物事を愛し、それに心がけられること。ま、その気持ちを「愛着」。

あいちやく(哀調)①もの悲しい調子。「―を帯びた歌」

あいちやく(愛重)(名・他スル)かわいがって大事にする。②野生の鳥を大事にする。③「一週間」

あいつ(彼・奴(代))①他称の人名代名詞。あの男。あの女。やつ。軽蔑または親しみの気持ちを含んでいる。②あの物。あれ。【参考】あいつの転。

あいつ(相次ぐ)①(自五)あつあつとあつあつとから続く。②選手がこいでゴールした。

あいつ(相・槌)①刀を鍛えるときなど、二人が向かいあって交互に打ちつ。

—を打つ、相手の話に調子を合わせてあつあつ。

あいて(相手)①②相対するもの。人。先方。電話の―③事をなす。人。仲間。遊び。④争いなどで相対する一方の人。競争者。

【度をきめること】

—しだ(一)次第」先方的人物や出方によってこちらの態

—ど(一)取る(他五)①争いの相手とする

②訴訟の相手として訴えをすすむ。

アイデア(idea)考え・思想①あるものを作るものとなる新しい

思いつき。着想。アイデア。②「哲」観念。イデー。

—マン(idea man)こう考へつく人。いい考へをき出す。

アイデアリスト(idealists)①理想家。理想主義者。②

「哲」観念論者。唯心論者。

アイデアリズム(idealism)①理想主義。②「哲」観念論。

【二一】

あう(合う)。(自五)①寄り集まって一つになる。

②一方が他方によく当てはまる。ぴったり。③調和する。この着物は色の帯が④一致する。意見が⑤理にかなう。⑥労力や元手をかけて損にならない。ひきあう。採算がとれる。⑦割安くとも。⑧(動詞の連用形の下に付いて)たがいに同じ動作をする。「語り(他あう)五」あわ(せ)(下)。

アウタルキー(Autarkie)自給自足。

アウト(外)①テニス・卓球など、ボールが線の外に出ること。②野球で、打者・走者がその権利を失うこと。

③テニス・卓球で、前半の九ボール。④イン。

カーブ(外曲)①(名・自スル)野球で、投手の投球の一種。打者の遠いほうに急に曲がり落ちる球。②(名)曲がり。③カーブ。

コース(和製英語)①野球で、打者に遠い方を通るボールの道筋。②陸上競技で、外側の走路。③インコース。

コーナー(和製英語)野球で、ホーム・ベースに立つ打者から遠い方のすま。外角。アウトサイド・イン・コーナー。

サイダー(outsider)①局外者。仲間に加わらない者。②ある体制に対して批判的な者。③(経)カルテル業者組合などに加入していない同業者。④(社)労働組合法規定の要件を欠く組合。⑤外角組合。

サイド(outside)①外側。外面。②テニス・バレーボールなどで、線の外側。また、線の外側にボールが落ちること。③アウト・コーナー。(インサイド)。

シュート(外射)①(名・自スル)野球で、投手の投球の一種。打者の外側にシュートする球。②(名)ゴロを打たされる。③イン・シュート。

ドロップ(outdrop)①屋外。②インドア。

打者から遠いほうに曲がり落ちる球。③インドロフ。

アウト(外)出力。コンピュータから出力装置を使用中に情報データを出力すること。②あらまし。大。

ライン(outline)①外郭線。輪郭。②あらまし。大。

アウトバーン(アウトバイン)ドイツの自動車専用高速道路。

アウフヘーベン(Aufheben)(名・他スル)①(哲)二つの矛盾を概念を、それのよいちたんと高い概念に調和統一すること。

うーあおか

と。矛盾や対立する二つの考えがあるとき、その両者のうちから妥当な点、都合のよいところを探り、不当なまたは都合の悪いところを除いて、新たな二つのものをつくり出す。高度の二つの考えをまとめ上げる。その作用をいう。揚棄。②揚棄。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

あうん(阿・呼・阿・山)①(仏)一切の現象の初めと終わりの象徴。②(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。③(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。④(仏)寺院の山門の両側にある仁王や狛犬などの象徴。

が、法規上「青」という。

「藍」は藍より出でて藍より青し(青色の染料は「藍」という草からとるが、染料となったものは「藍」よりも青い。意が「弟子が師よりもすぐれたものとなる。出藍」の意。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。

【青】青い。①動詞。②一節による。



【あおい】①

総称。おもに樹上で生活する。もりあかきなど。②体色が緑色のなせる俗称。とのまがえる・あまがえるなど。夏

あおかび〔青。黴〕は「種子」菌類の一種。胞子は青緑色。おもにパン・みかなどの食物に寄生する。ある種のあおかびからは、ペニシリンなどの抗生物質を産する。夏

あおがれびょう〔青枯れ病〕は「植」トマト・ナスなどの野菜をおかす病。土中のバクテリアが傷口から侵入して数日で青いまみれする。

あおき〔青木〕は①青々とした木。なま木。②「植」ミズナ科の常緑低木。春に紫褐色の小花を開く。冬、紅色の実がなる。

あおじり〔青。桐。梧。桐〕は「植」アオギリ科の落葉高木。街路樹・庭木に多く、樹皮は緑色。葉はてのひら状で大きい。夏より黄色の小花が咲く。材は家具などに使う。夏

あおぐ〔仰ぐ〕は①（他五）「顔を上に向ける」「天を」「星を見える」②尊敬する。「師と」③上の地位について。「氏を会長に」④教養を求め。「指示を」⑤ひと意に飲む。「毒を」可能あおける（自下）

あおぐ（扇ぐ・煽ぐ）は①（他五）「うちわ・あきなど」で風をおく。あおる。可能あおげる（自下）②「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）③「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）④「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑤「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑥「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑦「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑧「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑨「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑩「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑪「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑫「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑬「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑭「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑮「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑯「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑰「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑱「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑲「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）⑳「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉑「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉒「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉓「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉔「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉕「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉖「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉗「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉘「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉙「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉚「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉛「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉜「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉝「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉞「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㉟「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊱「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊲「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊳「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊴「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊵「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊶「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊷「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊸「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊹「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊺「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊻「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊼「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊽「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊾「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）㊿「扇く」は火をおくすために扇ぐ。あおる。可能あおげる（自下）

あおぐさ〔青草〕は「草」青々とした草。夏

あおぐさい〔青臭い〕は①（形）「青草のにおい」においがする。②「臭い」の表現。文（あおぐさい）

あおぐさ〔石蕨〕は「植」浅海の岩につく緑藻類の海藻。あおりの代用として食用する。図

あおさむらひ〔青侍〕は①身分の低い侍。②青色の袍を着た（た）公家などに仕えた六位の侍。

あおさめる〔青さめる〕は①（自下）「青くなる」。青みがかった色になる。②血の氣を失って顔の色が青白くなる。③「めた顔」文（あおさめる）

あおじり〔青地〕は「青」青色の下地。図や文字が青地に白く、または白地に青く出る。設計図などに用いる。ブループリント。②（多く）設計図に用いられる（た）物事の予定・計画・未来図。将来の。③「青い」の表現。④「青い」の表現。⑤「青い」の表現。⑥「青い」の表現。⑦「青い」の表現。⑧「青い」の表現。⑨「青い」の表現。⑩「青い」の表現。⑪「青い」の表現。⑫「青い」の表現。⑬「青い」の表現。⑭「青い」の表現。⑮「青い」の表現。⑯「青い」の表現。⑰「青い」の表現。⑱「青い」の表現。⑲「青い」の表現。⑳「青い」の表現。㉑「青い」の表現。㉒「青い」の表現。㉓「青い」の表現。㉔「青い」の表現。㉕「青い」の表現。㉖「青い」の表現。㉗「青い」の表現。㉘「青い」の表現。㉙「青い」の表現。㉚「青い」の表現。㉛「青い」の表現。㉜「青い」の表現。㉝「青い」の表現。㉞「青い」の表現。㉟「青い」の表現。㊱「青い」の表現。㊲「青い」の表現。㊳「青い」の表現。㊴「青い」の表現。㊵「青い」の表現。㊶「青い」の表現。㊷「青い」の表現。㊸「青い」の表現。㊹「青い」の表現。㊺「青い」の表現。㊻「青い」の表現。㊼「青い」の表現。㊽「青い」の表現。㊾「青い」の表現。㊿「青い」の表現。

あおしんごう〔青信号〕は「交通」交通上の進行・安全を知ら

あおすじ〔青筋〕は①青いすじ。②皮膚の表面に青く浮きた静脈。

あおす（を）を立てる（感情が激すると静脈がういてくること）かんしやくを起す。激しく怒る。

あおぞら〔青空〕は①よく晴れた青い空。晴天。碧空。②（名詞に冠して）屋外で行うこと。―市場

あおた〔青田〕は「稲」青々とした田。ま稲の実らない田。①「が」―契約。②「俗」会社などが卒業生の学生と早くから人社契約を結ぶこと。青田刈り。③「米穀商」などが稲の成熟前を田の収穫を見越して、あらかじめ買いつけておくこと。④「が」―「刈り」。―あおたが①

あおだいしゅう〔青大井〕は「動」日本産のへびの一種。暗緑色で背に四本の縦線があり、日本最大のへびで無毒。人家の近くにすむ。ねずみ・鶏卵などを食す。体長一メートル。時に二・五メートルをええる。

あおだけ〔青竹〕は①幹の青い竹。②「笛」の別称。

あおだたみ〔青畳〕は新しくて表の青い畳。③「波」波のない静かな海面や、一面青々とした田畑を比喩的にいふこともある。

あおだち〔青立ち〕は「稲」が未熟のままではえていること。また、その状態の稲。

あおてんじょう〔青天井〕は「空」空を天井に見立てて。②「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。③「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。④「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑤「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑥「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑦「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑧「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑨「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑩「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑪「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑫「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑬「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑭「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑮「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑯「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑰「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑱「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑲「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑳「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉑「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉒「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉓「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉔「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉕「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉖「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉗「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉘「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉙「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉚「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉛「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉜「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉝「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉞「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉟「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊱「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊲「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊳「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊴「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊵「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊶「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊷「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊸「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊹「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊺「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊻「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊼「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊽「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊾「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊿「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。

あおとん〔青心〕は「青」青々とした新鮮な菜。

あおにさい〔青二才〕は「年」若く未熟な男を輕蔑していう語。②「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。③「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。④「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑤「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑥「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑦「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑧「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑨「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑩「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑪「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑫「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑬「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑭「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑮「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑯「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑰「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑱「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑲「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。⑳「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉑「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉒「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉓「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉔「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉕「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉖「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉗「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉘「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉙「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉚「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉛「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉜「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉝「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉞「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㉟「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊱「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊲「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊳「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊴「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊵「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊶「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊷「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊸「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊹「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊺「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊻「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊼「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊽「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊾「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。㊿「青」低。質の密な青灰色の粘板で作った。

あおのけ〔仰のけ〕は「仰」仰ぐ。上を向く。あおむ。②「他」下。上を向く。あおむ。③「他」下。上を向く。あおむ。④「他」下。上を向く。あおむ。⑤「他」下。上を向く。あおむ。⑥「他」下。上を向く。あおむ。⑦「他」下。上を向く。あおむ。⑧「他」下。上を向く。あおむ。⑨「他」下。上を向く。あおむ。⑩「他」下。上を向く。あおむ。⑪「他」下。上を向く。あおむ。⑫「他」下。上を向く。あおむ。⑬「他」下。上を向く。あおむ。⑭「他」下。上を向く。あおむ。⑮「他」下。上を向く。あおむ。⑯「他」下。上を向く。あおむ。⑰「他」下。上を向く。あおむ。⑱「他」下。上を向く。あおむ。⑲「他」下。上を向く。あおむ。⑳「他」下。上を向く。あおむ。㉑「他」下。上を向く。あおむ。㉒「他」下。上を向く。あおむ。㉓「他」下。上を向く。あおむ。㉔「他」下。上を向く。あおむ。㉕「他」下。上を向く。あおむ。㉖「他」下。上を向く。あおむ。㉗「他」下。上を向く。あおむ。㉘「他」下。上を向く。あおむ。㉙「他」下。上を向く。あおむ。㉚「他」下。上を向く。あおむ。㉛「他」下。上を向く。あおむ。㉜「他」下。上を向く。あおむ。㉝「他」下。上を向く。あおむ。㉞「他」下。上を向く。あおむ。㉟「他」下。上を向く。あおむ。㊱「他」下。上を向く。あおむ。㊲「他」下。上を向く。あおむ。㊳「他」下。上を向く。あおむ。㊴「他」下。上を向く。あおむ。㊵「他」下。上を向く。あおむ。㊶「他」下。上を向く。あおむ。㊷「他」下。上を向く。あおむ。㊸「他」下。上を向く。あおむ。㊹「他」下。上を向く。あおむ。㊺「他」下。上を向く。あおむ。㊻「他」下。上を向く。あおむ。㊼「他」下。上を向く。あおむ。㊽「他」下。上を向く。あおむ。㊾「他」下。上を向く。あおむ。㊿「他」下。上を向く。あおむ。

あおのけ〔仰のけ〕は「仰」仰ぐ。上を向く。あおむ。②「他」下。上を向く。あおむ。③「他」下。上を向く。あおむ。④「他」下。上を向く。あおむ。⑤「他」下。上を向く。あおむ。⑥「他」下。上を向く。あおむ。⑦「他」下。上を向く。あおむ。⑧「他」下。上を向く。あおむ。⑨「他」下。上を向く。あおむ。⑩「他」下。上を向く。あおむ。⑪「他」下。上を向く。あおむ。⑫「他」下。上を向く。あおむ。⑬「他」下。上を向く。あおむ。⑭「他」下。上を向く。あおむ。⑮「他」下。上を向く。あおむ。⑯「他」下。上を向く。あおむ。⑰「他」下。上を向く。あおむ。⑱「他」下。上を向く。あおむ。⑲「他」下。上を向く。あおむ。⑳「他」下。上を向く。あおむ。㉑「他」下。上を向く。あおむ。㉒「他」下。上を向く。あおむ。㉓「他」下。上を向く。あおむ。㉔「他」下。上を向く。あおむ。㉕「他」下。上を向く。あおむ。㉖「他」下。上を向く。あおむ。㉗「他」下。上を向く。あおむ。㉘「他」下。上を向く。あおむ。㉙「他」下。上を向く。あおむ。㉚「他」下。上を向く。あおむ。㉛「他」下。上を向く。あおむ。㉜「他」下。上を向く。あおむ。㉝「他」下。上を向く。あおむ。㉞「他」下。上を向く。あおむ。㉟「他」下。上を向く。あおむ。㊱「他」下。上を向く。あおむ。㊲「他」下。上を向く。あおむ。㊳「他」下。上を向く。あおむ。㊴「他」下。上を向く。あおむ。㊵「他」下。上を向く。あおむ。㊶「他」下。上を向く。あおむ。㊷「他」下。上を向く。あおむ。㊸「他」下。上を向く。あおむ。㊹「他」下。上を向く。あおむ。㊺「他」下。上を向く。あおむ。㊻「他」下。上を向く。あおむ。㊼「他」下。上を向く。あおむ。㊽「他」下。上を向く。あおむ。㊾「他」下。上を向く。あおむ。㊿「他」下。上を向く。あおむ。

あおのけ〔仰のけ〕は「仰」仰ぐ。上を向く。あおむ。②「他」下。上を向く。あおむ。③「他」下。上を向く。あおむ。④「他」下。上を向く。あおむ。⑤「他」下。上を向く。あおむ。⑥「他」下。上を向く。あおむ。⑦「他」下。上を向く。あおむ。⑧「他」下。上を向く。あおむ。⑨「他」下。上を向く。あおむ。⑩「他」下。上を向く。あおむ。⑪「他」下。上を向く。あおむ。⑫「他」下。上を向く。あおむ。⑬「他」下。上を向く。あおむ。⑭「他」下。上を向く。あおむ。⑮「他」下。上を向く。あおむ。⑯「他」下。上を向く。あおむ。⑰「他」下。上を向く。あおむ。⑱「他」下。上を向く。あおむ。⑲「他」下。上を向く。あおむ。⑳「他」下。上を向く。あおむ。㉑「他」下。上を向く。あおむ。㉒「他」下。上を向く。あおむ。㉓「他」下。上を向く。あおむ。㉔「他」下。上を向く。あおむ。㉕「他」下。上を向く。あおむ。㉖「他」下。上を向く。あおむ。㉗「他」下。上を向く。あおむ。㉘「他」下。上を向く。あおむ。㉙「他」下。上を向く。あおむ。㉚「他」下。上を向く。あおむ。㉛「他」下。上を向く。あおむ。㉜「他」下。上を向く。あおむ。㉝「他」下。上を向く。あおむ。㉞「他」下。上を向く。あおむ。㉟「他」下。上を向く。あおむ。㊱「他」下。上を向く。あおむ。㊲「他」下。上を向く。あおむ。㊳「他」下。上を向く。あおむ。㊴「他」下。上を向く。あおむ。㊵「他」下。上を向く。あおむ。㊶「他」下。上を向く。あおむ。㊷「他」下。上を向く。あおむ。㊸「他」下。上を向く。あおむ。㊹「他」下。上を向く。あおむ。㊺「他」下。上を向く。あおむ。㊻「他」下。上を向く。あおむ。㊼「他」下。上を向く。あおむ。㊽「他」下。上を向く。あおむ。㊾「他」下。上を向く。あおむ。㊿「他」下。上を向く。あおむ。

あおばえ〔青。蠅。蒼。蠅〕は①「動」大形で腹の青黒く光っている。②「はえ」の（た）とてつぎまへ人。

あおひむ〔青ばむ〕は①（自五）「青みをおぼる」。

あおひょうた〔青鰐〕は①（自五）「青みをおぼる」。

あおぶく〔青ぶく〕は①（名・自スル）顔やはれものなどが、青くふけること。また、その人。

あおぼん〔青本〕は①「文」表紙が青に近いもえき色であること。②江戸時代の草紙の一種。婦女子用の絵本。

あおまめ〔青豆〕は「植」①大豆の一種。実は大粒で緑色。②「豆」。

あおみ〔青み〕は①青い色。また、その程度。②吸い物・刺身。③「洗」洗きなななに添える緑色の野菜。

あおみどり〔青味泥・水綿〕は「植」池や沼などの水中に見られる毛のように細長い緑藻。一列の細胞から接合生殖するので、生物実験材料に利用される。あおみどり。

あおむ〔青む〕は①（自五）「青む」。青なる。

あおむけ〔仰向け〕は①（自五）「青む」。青なる。

あおむけ〔仰向け〕は①（自五）「青む」。青なる。

あおむけ〔仰向け〕は①（自五）「青む」。青なる。

あおむけ〔仰向け〕は①（自五）「青む」。青なる。

あおむけ〔仰向け〕は①（自五）「青む」。青なる。